

正倉院年報

一、古裂の整理

昭和三十三年度においては主として第八十七号櫃に納める布、綿及木綿断爛中の衣服類、並びに昨年度より引続き従事中の絹絶類塵芥の整理を行つた。その結果は左のとおりである。

一、黄布袍 一領 第四十六号

黄染細布、上領、長一三七糎

一、白布袍 一領 第四十七号

上領、長一一一糎

一、白布袍 一領 第四十八号

上領、左衽、長一二〇糎

一、白布袍残闕 一領 第四十九号

上領、長一二五糎

一、白布袍残闕 一領 第五十号

上領、長一二九糎

一、縹布袴 一腰 第十六号

閉袴式、長八一糎

一、白布袴 一腰 第十七号

開袴式、長八六糎

一、白布袴残闕 第十八号

開袴式、片隻のみ、長七〇糎

一、白布衫 一領 第十四号

白絶襟、上領、長七九糎、左衽裏墨書「東大寺、天平勝宝四年四月九日、後一、獅子児」。東寺綱印あり。東大寺大仏開眼会に当り呉楽獅子児が用いたことが知られる。

一、白布衫残闕 第十五号

白絶襟、上領

一、布接腰 一隻 第五十号

白細布、白絶紐、長八一糎

一、布接腰残闕 一両 第五十一号

白細布、闕失多し。

一、布接腰残闕 二隻 第五十二号

並に白細布、闕失多し。

一、玻璃装古裂 十枚 第二十二号—第三十二号

刺繡断片三百四十一片、彩絵裂片二十一、錦類残片十一片を分類整理した。刺繡残片中金糸入刺繡は紫糸を心とした紫羅地に赤、黄、緑、紺等の撚り色糸を以て鳳凰、樹木、草花などを刺繡し、文様の輪廓を金銀糸で荘る。この金銀糸は普通の金銀糸と異り裏打紙を施さず、金銀箔を直接絹糸に纏うて金銀糸を作るといふ特種な手法を用いている。残破の余小片百数十片となりその全容を窺うことは出来ない。もと法隆寺に伝存されたものと考えられる。(図版第一)

一、古 裂 帖 三冊 第五八四号—第五八六号

錦類断片九百七十七片、楷文絶断片百五十片を分貼した。錦類断片中の犀円文錦は本紀要第七号に太田英蔵氏が発表された犀円文錦と同裂である。また楷文絶断片は黄糸及び赤糸に花鳥文を黒で現らわしたものである。かつて屏風装とした花鳥文楷文絶の断片で楷文袍の残片である。

二、経 卷 の 修 理

本年度において聖語藏経卷の修理を完了したものは乙種写経六十四卷(修理の結果六十三卷となる)であつて、それぞれ旧態を存して修補を加えた。卷中識語のあるものを左に掲げた。

一、乙種 第一六号 勝光天子経 一卷

卷末識語「文永二年七月二十六日於海住山十輪院一校畢 釈頼承」

一、乙種 第一九号 勝思惟梵天所問経卷一

卷末識語「文永七年^{庚午}七月十八日^{未時}於東大寺尊勝院詔宗成少輔公權僧正宗性」

一、乙種 第二〇号 菩薩瓔珞本業経卷上

卷末識語「応安元年^{戊申}九月廿日^{結縁比丘原鑑大願主伝智}」

一、乙種 第二三号 大般若経卷五十七

卷末識語「奉施入春日御社 承久三年^{歲次辛巳}二月五日代人散位從五位下中臣連遠経(花押)一男中臣忠基」

一、同 大般若経卷六十一

卷末識語「嘉元二年^{甲辰}十一月十四日始交此帙畢 大法師性謹」

三、宝 物 の 修 理

未整理宝物の修理もまた前年の緒を継ぎ、その本年度において完了したものは新宝庫納在第六十九号櫃、第九十七号櫃及び第九十九号櫃に納むる左の諸品である。

一、二十六 足机 第八号 一脚 堅五三櫃、横一〇四櫃 高八二櫃

一、同 第九号 一脚 堅五四櫃、横一〇四・三櫃 高八二・五櫃

一、二十八 足机 第十号 一脚 堅四〇・五櫃、横六二・三櫃 高四四櫃

一、彩絵二十八 足机 第十四号 一脚 堅五四櫃、横一〇四・五櫃 高九八・五櫃

彩絵多足机中文様のよく残るもので、天板の側面、脚、脚座に胡粉、丹、蘇芳、緑青等にて花卉文を描く。(図版第二)

一、彩絵二十八 足机 第十五号 一脚 堅五二・三櫃、横一〇四櫃 高九二櫃

一、三十足机第十六号 一脚 堅五〇櫃、横八九櫃
 高八六櫃
 一、漆皮箱 一合 堅四三櫃、横五七櫃
 高一四・五櫃
 牛皮の上に黒漆を塗る。角丸面取被せ蓋造、袈裟箱の類か。形態および製作手法より見て奈良時代をやゝ下るものと考えられる。

四、宝物の特別調査

(イ) 絵画調査

去る三十一年度より始められた絵画調査は本年度を以て完了した。本年度において調査した宝物は左のとおりである。調査員は文化財保護委員会美術工芸課絵画主任松下隆章、京都国立博物館学芸課美術室長島田修二郎、奈良国立博物館学芸課絵画室長松村政雄、名古屋大学教授山崎一雄の諸氏である。

- 一、蘇芳地金銀童子鼓楽絵箱 一合
- 一、黒柿蘇芳染金銀山水絵箱 一合
- 一、漆金薄絵盤(香印坐) 一雙
- 一、楓蘇芳染螺鈿槽琵琶 騎象鼓楽絵撥 一面
- 一、紫檀木画槽琵琶 騎狐絵撥 一面
- 一、同 山水古人捍撥 一面
- 一、紫檀槽琵琶 鷺鳥絵捍撥 一面
- 一、漆仏龕扉 一扇
- 一、漆金銀絵仏龕扉 四扇

(ロ) 書跡調査

書跡調査も亦前年に引続き主として続々修正倉院古文書第一帙より第十六帙に至る書巻に亘り行われた。巻中すこぶる優秀な筆跡多く奈良朝としても早期に属するもの、欧陽詢を想わせる書風のもの、顔真卿風と認められるもの、空海の筆法と密接に相通ずるもの等平安初期のいわゆる三筆を始めとする書法の源流をこれ等の文書の中に明らかに求められたことは、従来十分には系統を立てることを得なかつた奈良時代から平安時代初期にわたる期間の空白の部分を補填するものであつて極めて重要な意義を持つものであつた。調査はこの他左記のものについても行われた。調査員は前年同様京都国立博物館長文学博士神田喜一郎、大阪市立大学教授内藤乾吉、文化財保護委員会美術工芸課書跡主任田山信郎、東京国立博物館美術課書跡室長堀江知彦の四氏である。

- 一、天平勝宝八歳六月廿一日献物帳 一卷 国家珍宝帳
- 一、同 一卷 種々薬帳
- 一、天平勝宝八歳七月廿六日献物帳 一卷 屏風花氈帳
- 一、天平宝字二年六月一日献物帳 一卷 大小王真跡帳
- 一、天平宝字二年十月一日献物帳 一卷 藤原公真跡屏風帳
- 一、鳥毛篆書屏風 六扇
- 一、鳥毛帖成文書屏風 六扇
- 一、梵網經 一卷

五、聖語藏古訓点経卷の複製

古訓点経卷の複製は本年度においては左記三卷を完成した。移点は奈良学芸大学助教授鈴木一男氏に依頼して行つた。

- 一、唐経 第一三三号 説無垢称経卷二 一卷
- 一、天平十二年 御願 経 第八一号 四分律卷三十七 一卷
- 一、神護景雲二年 御願 経 第五七号 羅摩伽経卷二 一卷

六、古文書マイクロファイルの作成

前年より継続中の古文書類マイクロ・ファイルの撮影は本年度におい

ては続々修正倉院古文書第八帙より第十七帙に至る計百二十三巻である。

七、正倉院評議会

昭和三十三年度においては、六月二十五日に第十七回評議会を開催し、曝涼の方法、庫内の特別参観、奈良国立博物館への宝物の貸出、宝物のカラーフィルム撮影、宝物の特別調査及び史跡東大寺旧境内の現状変更問題等について審議が行われた。